



写真提供=毎日新聞

宗 像

3月祭事暦

- 毎月1・15日 つきなみ 月次祭
午前10時 高宮 祭
第二宮・第三宮 祭
- 引き続き 宗像護国神社
月命日祭(1日)
遙 拝(15日)
午前11時 総社 祭
浦安舞 奉奏(1日)
豊栄舞 奉奏(15日)
- 4日 午前11時 氏貞公墓前祭
於=宗像市上八氏貞公墓
本年は宗像大社当番により、神式
- 19日 午前11時 松尾神社祭
於=境内 松尾神社

父子でのぞんだ世界挑戦

宗像大神の御加護を受け

越本隆志選手、池仁珍チインジン(韓国)を敗り、

日本人最高年齢で世界王座獲得

既報の通り、一月二十九日福岡市の九電記念体育館で、WBC(世界ボクシング評議会)フェザー級世界タイトルマッチ十二回戦が、観衆約三〇〇〇人が見守る中行われ、当大社を篤く崇敬する越本隆志選手(三十五歳)とFUKUKAIIが、王者の池仁珍(三十二歳)と韓国に、二対一の判定で勝利し、二度目の世界挑戦で新王者に就いた。

所属ジム会長の息子が世界王者になるのは初めてであり、三十五歳での世界王者は日本のボクシング史上最年長で、輪島功一(スーパーウェルター級)選手の三十二歳九ヶ月の記録を三十年振りに塗り替えた。

日本人のフェザー級世界王座奪取は、柴田国明選手以来三十六年振り。九州のジムから初めて世界王者が誕生した。



二月三日の節分は、立春の前日にあたり、旧暦では正月元日から七日までの間にあたる▼いま、全国各地で行われている節分行事の多くは、室町時代頃からの伝統が一般的である。これは平安時代からの宮中行事追儺にならった社寺の行事であり、悪霊退散の呪術的な意味をもち、年男が豆を撒き、鬼を(悪霊)を追い払うのである▼この豆には穀霊という霊力が宿るものと考えられ、豆の語源「まめ」は「魔滅」から起きているといわれている▼この時期に、厄年・厄除被いを受ける参拝者が後を絶たないのもこの伝統が慣習となったものである▼厄年の厄被いはもともと陰陽道から来ており、「源氏物語」若葉の巻に「紫上が三十七歳の厄年に加持祈禱を行い物忌をした」と記されている▼厄は年ばかりでなく、月厄・日厄・時厄もあり、その時には障りのあることは慎み、厄を転じて福となす、祓を行う、これが、節分の豆撒きに通じている▼我が国の昔から連綿と受け継がれている、伝統行事の意義を再認識し、豆をまき「魔滅」を行い、よりよい幸多き一年にしたいものである。(H.N)

神具・装束 結婚式場調度品

福岡店 〒812-0045福岡市博多区東公園2-31
電話 福岡(092)651-9456番

本店 〒600-8231京都市下京区油小路六条北入
電話 (075)341-3341(代)~4番
(075)343-3341番

井筒

木組の家 匠の技

総合建築業 株式会社 弘江組

〒811-3406福岡県宗像市稲元1025 電話(0940)32-2567

試合ハイライト

序盤、越本選手の「王者対策」が威力を発揮する。トリッキーな動きを見せる王者に対し、自らのスタイルである足を使つての左右のフットワークで、相手との距離を保つアウトボクシングを貫き、冷静に右のリードジャブを繰り出し、的確に王者の顔を射抜いていった。逆に打ち合いを得意とする王者が近付くと、鋭い左カウンターを見舞った。

中盤、王者はやくもスタミナ切れ足が止まる場面が増えたが、それでも手数は衰えず、左右のショートフックを繰り出し、鋭い踏み込みから強烈なパンチを越本選手に打ち込み七ラウンドではリング際に追い込んでラッシュ。冷やつとする場面もみられたが、同選手は間げきを縫つてのカウンター、効果的な左ストレートを打ち込み何とか耐え抜いた。

そして終盤。池の息が上がっても、越本選手の鍛えた肉体は戦いを続けたが、逆にこのままではポイントが取れないと、自ら接近戦を挑み、最後の二ラウンドは壮絶な打ち合いとなった。

十一回、王者が偶然によるバツティング（頭突き）で減点もあり、

最後は判定勝ち。真つ向勝負の挑戦者に最後は運も味方した。

父子二人三脚

越本選手はジムの会長兼トレーナーである父英武さんとの、父子二人

三脚での世界挑戦で話題となったが、道のりはけっして平坦なものではなかった。

父の英武さんもプロボクサーで、現役引退後、福岡市内でジムの裏方を務めていた。その頃、同じ九電記念体育館で当時の世界戦があり、幼稚園児であつた隆志選手も

日本王者誕生に立ち会つた。原点はこの幼少時の記憶にあり、その父が福津市にジムを開いた時、自然な流れでボクシングを始めた。

しかし、父の英才教育に反発し、九産大九州高校卒業後に家出、三年近くして戻ってきた時、ようやく腹を割つて話し、もう一度ボク



撮影=山下 善也

シングを一から始めたという。しかし、やつと挿んだ最初の世界挑戦をフレディ・ノーウッド（米国）に敗れチャンスを逃した。限界説が囁かれ、前回の世界挑戦から今回の挑戦までには六年を擁し、今回負ければ引退、十四年間のプロボクサー生活の全てを賭けて臨んだ。

世界戦の決まった昨年十一月九日当日に、父子はすぐに当大社に参拝。トレーニングの安全を祈つたが、勝利を確信した落ち着きを放つており、さらに必勝を祈念した元旦の参拝では、やることを全てやり終えた充実感が見られ、まさに「人事を尽くして、天命を待つ」という感で、只管に宗像大神の御加護を願つていた。

この日も英武さんはセコンドを務め、判定のリングアナウンスが告げられた瞬間、新王者は真つ先に父・英武さんに抱きついていった。二人とも泣き、これ以上ない最高の親孝行であつた。

試合後には、言い訳にしくなかつたと、六年前の練習中に肩の筋肉を断裂する重傷を負つていたことを明かした。完治はしない。重ねた年月が無駄ではなかつたことを、三十五歳の新王者はリングで証明した。

ファイトマネーはゼロ

世界は遠かった。集客の面でも資金面でも、地方のジムが世界戦を誘致するには限界があり、前回の挑戦から六年を要した。世界戦の実現である宗像青年会議所（JC）であった。同選手も数年前から講演な

どを通して活動に協力しているが、事前のPR、チケット販売、会場設営など、巨額の費用がかかる世界戦を支えた。

「いつからか、我々も越本選手と一緒に世界チャンピオンという、同じ夢を追っていた。とにかく安心して、重ねた年月が無駄ではなかったことを、越本選手はリングで証明してくれた」と宗像JCの戸波真

也さん（宗像大社氏子青年会理事）は、試合の三日後に齎行された月次祭に参列され、熱く語っていた。

越本選手自身も「プロ生活十四年、コツコツとこの福岡で地道に歩んできて、神様が御褒美をくれた」とコメントしている。今後、新王者は、年内に防衛戦を行う予定。越本選手の今後益々の御活躍をお祈り申し上げます。



撮影=山下 善也



写真提供=毎日新聞

越本隆志（こしもと・たかし）

昭和46年（1971）1月5日生まれ（35歳）。福岡市東区出身。中学三年で父が開いた福岡スポーツ（当時）に入門。平成4年（92）11月、21歳でプロデビューし、同8年（96）日本フェザー級王者となった。同12年（00）1月WBA同級王者フレディ・ノーウッド（米）にKO負けし、王者奪取に失敗したが、同13年（01）東太平洋同級王者になり、七連続防衛した。フットワークで動き回り右ジャブ、左ストレートを繰り出す左アウトボクサー。

176センチ。42戦39勝（17KO）1敗2分け。



宗像大社春まつりの御案内

春の大祭を左記行事日程で齎行致しますので、皆様方お誘いの上、御参拝下さいますようお願い申し上げます。

三月三十一日（金）午後五時 総社地主祭
午後六時 宵宮祭
四月 一日（土）午前十一時 大祭

（氏子奉幣・主基地方風俗舞・浦安舞）
二日（日）午前十一時 総社祭（献上若布採取者表彰）
交通安全講話

午前十一時四十分

宗像護国神社祭

高宮祭

第二宮・第三宮祭

午後二時

献茶祭（南坊流小方社中）

未来に残したい漁業漁村の歴史文化財百選に 「中津宮」と「みあれ祭」が認定

水産庁で組織される選定委員会で、この度宗像を代表する神事である「みあれ祭」と「中津宮」の二件が、「未来に残したい漁業

漁村の歴史文化財百選」(以下「漁村百選」)に認定された。漁村百選とは、地域住民が自分の住む漁村の魅力を再認識し、

都市との交流を進め、地域の活性化につなげ、国民の水産業及び漁村に対する理解や関心を深めるという趣旨のもので、基準としては、①適切に維持管理及び保全がなされている、②水産業及び漁村の理解を深める上で有意義、且つ歴史上重要な役割を果たしてきたもの、③歴史的な事実または伝説にいわれがあり、歴史上または文化上価値の高いもの、④漁村を象

徴する独特且つ伝統的なものである、などがある。正月の賑わいもまだ落ち着かない一月中旬、宗像市役所産業振興部を通して、この漁村百選に、宗像を代表する海洋神事「みあれ祭」が候補に上がっているとの連絡を受け、同部の方とともに提出書類の作成に取りかかった。

その後、島の神社としては歴史・規模ともに大きな「中津宮」も候補に上がったとの連絡を受け、二件の書類を無事提出すると、二月八日認定の旨が書面で連絡された。

今後、二月中旬にHP、新聞紙上で公表されるとともに、二月二十二日の「オーライ！ニッポン」全国大会へ農林水産大臣より認定証を交付される予定となっている。当大社は周知の通り、古代より海上交通の要所である北海道中に、沖・中・辺津宮の三宮がそれぞれに鎮座し、篤い崇敬を受けてきており、島・漁業・漁師との関係はその根幹を成している。この認定を契機に、境内の維持管理、御神徳の発揚は勿論、市民運動にもなっている世界遺産登録運動に弾みをつけていきたい。



海上神幸「みあれ祭」(10月1日)



大島港の朝焼け



中津宮での祭典風景



中津宮本殿(県指定 重文)

節分祭

二月三日午前十時から、祈願殿で節分祭が斎行された。

暦の上では翌日より春であり、朝から天候にも恵まれたが、春と呼ぶにはまだまだ寒い一日となつ

た。
現在「節分」とは立春の前日、太陽暦では二月三日または四日を指すが、本来は四季の終ることに、立春・立夏・立秋・立冬の前日を節分といつ

ていた。

その中で、立春の前日は二十

四節気（

陰暦の季節

区分）の

起点、つま

り一年初

め」とされ

この日に災

難消除、悪

鬼、邪気を

祓う、或いは厄除けのお祓いを受けると、一年間平穩無事であると考えられてきた。
祭場となった祈願殿内は、年男をはじめ、当大社責任役員、氏子役員、地元総代に、小山県議、原田宗像市長、吉武観光協会会長、市内の各幼稚園児童、多くの参拝者等で溢れかえる中、祭典は始まった。
まず、神前にお供えされた約一万袋の福豆袋をお祓いし、神島宮司が無病息災・延命招福を祈る祝詞を奏上、続いて各代表者等が玉串を捧げ、今年一年の厄除開運を祈念した。
その後、祈願殿正面階段上で、左右二手に分かれた神職により、



1月末から始められた「福豆」奉製作業

追儺の神事「鳴弦の儀」が執り行われ、双方の神職は葦矢・桃矢を携えて、一人は天空に向け、もう一人は地上に向けて矢を三度射て、災厄や邪気を祓い清めた。

鳴弦の儀終了後、豆打式が始まり高向権宮司が先導し「鬼は外、福は内」と第一声を発声、続いて神島宮司以下神職と、袴を身に着けた年男が手に持った一升枡から一斉に福豆と福袋（福豆、紅白小餅、菓子等）を撒き、参列者は今年の「福」を授かるうと、縁起袋を手にし盛大裡に全ての儀を終えた。
祭典終了後、清明殿に会場を移し直会が催され、参拝者一同和やかな一刻を過ごし、節分祭の諸行事は無事終了した。



文化財防火デーに伴い 第三十二回 防火訓練を実施

国指定重要文化財の本・拝殿をはじめ、神宝館で収蔵・展示する約十二万点にのぼる国宝・重要文化財を火災から守る為、第五十二回文化財防火デーの一月二十六日、十二回目を迎えた防火訓練を実施した。



午前九時五十分、本殿裏の森から出火し、本・拝殿に火勢が迫っているとの想定で開始された。火災を発見した巫女が直ちに火災報知器を押し、社務所に通報。本社自衛消防団は本殿へ急行。巫女によるバケツリレーと施設消火班の神職、管理員、又宗像市消防団第十一分団により放水を行い、無事鎮火となった。



引き続き折からの強風にあおられ、祈願殿に延焼したとの想定で訓練が行われた。一一九番通報で、宗像地区消防本部・宗像市消防団の各消防車両七台がサイレンを鳴らしながら第一駐車場に集結。素早くそれぞれの配置につき、放水を開始した。約十分後無事鎮火、消火活動を終了した。本番さながらの消火活動に、多くの参加者が圧倒される面持ちで見入っていた。消火活動終了後、参加者一同第一駐車場に整列。宗像地区消防本部、宗像市教育委員会、宗像市消防団長より講評が行われ、最後に神島宮司が防火訓練協力の御礼挨拶を行った。

文化財防火デー

昭和二十四年(一九四六)一月二十六日に、世界最古の木造建築である法隆寺(奈良県斑鳩町)の金堂で火災が発生。国民的財産である金堂の内部、貴重な壁画が焼失したことから、文化財保護と防火管理体制の意識を高めるために、この「文化財防火デー」が設けられた。

この日を中心に全国各地の国宝・重要文化財を有する神社・仏閣で防火訓練が行われており、その様子はテレビ・新聞でも報道され強化が図られている。

当大社でも重文の本・拝殿をはじめ、神宝館で十二万点にのぼる国宝・重文を所蔵しており、これら「日本の宝」を守る為、毎年大社職員は勿論、地域をあげて防火訓練を行っている。



(続)

鉄の怪物

201

いしい ただし



男たちの大和 ①

新兵たちを乗せた内火艇は、沖合の桂島泊地に碇泊する駆逐艦隊の方にむかい発進していった。新兵たちは、その時戦艦大和をはじめて目にする。

『全長二六三メートルの巨大な戦艦が眼前をふさいでいた。』
「おい、見ろ、あれが大和だ！」

― (中略) ―

驚嘆して見上げる新兵たちの目に、仏塔のようにそびえ立つ檣楼、三連装の巨大な主砲塔、ハリネズミのようにびっしりと並んだ機銃群が迫ってきた。鋼鉄の巨艦は、城塞のようにあたりを睥睨していた。「あれが世界一の戦艦か！」
「すげえ、山みたいだ」「フネというより鉄の島だなあ……」

「新兵たちは歓喜にわいた。顔を赤くし、こぶしを突き上げ、騒ぐ血潮を抑えきれないようすで口々に何か叫んでいた。頭上には、黄金色に輝く菊花の紋章がのしかかっていた」(小説「男たちの大和」辺見じゅん・角川春樹事務所二〇〇五年)より。

「大和」はその大和をテーマにした戦争映画である。大和をテーマにしたものは数として多くはないが、今回の映画は内容といい、そのセットや規模の大きさといい、見応えのある作品となっている。昭和十九年四月、呉軍港に六十四名の新兵が大和に乗艦、厳しい訓練、友情、束の間の下艦、親子の別れ、純愛などがスケッチ風に描かれていく。涙もよく出た。

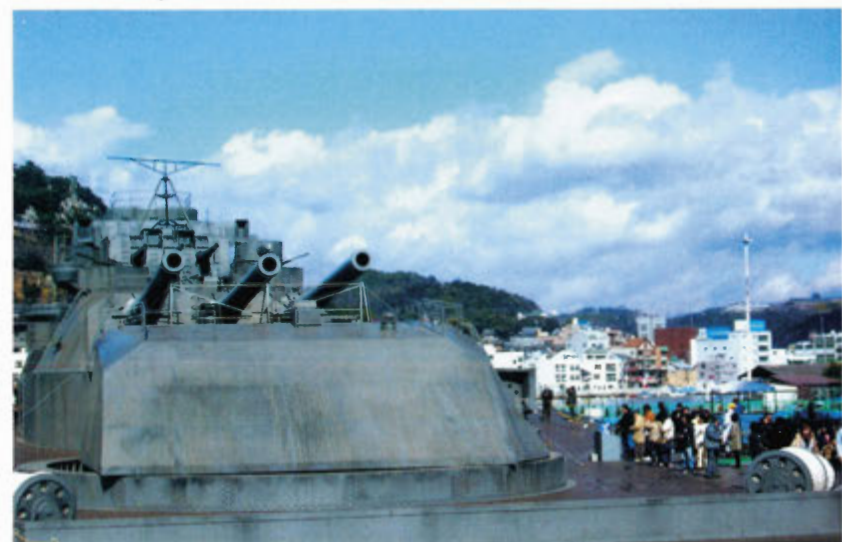
シテ、沖縄ノ敵泊地ニ突入シ、所在ノ敵輸送団ヲ攻撃撃滅スベシ」
「敵船団ヲ撃滅シタルノチ、嘉手納基地ニ突入シ、艦砲射撃シツシ陸地ニ乗リ上ゲルベシ」の命がくだる。
大和は巡洋艦「矢矧」(六六五二トン) 駆逐艦八隻を率いて出撃した。航空機の掩護はなかった。正に特攻作戦であり燃料も片道分しか積んでなかった。



大和ミュージアム 大和10分の1模型

量六四、〇〇〇トン、全長二六三・〇メートル、速力二七・三キロノット、主砲四六センチ 砲九門、竣工は昭和十六年十二月、日米開戦とほぼ同時頃であった。広島県呉工廠で完成、世界最大、日本海軍の総力を結集した戦艦であり、空前絶後の巨艦であった。映画「男たちの

昭和一九年レイテ湾突入をはかった武蔵と大和は、作戦計画中止で反転、米航空機の攻撃で武蔵は魚雷二四本、爆弾十七発以上を受けて沈没。大和は辛うじて日本に戻った。昭和二十年四月沖繩戦がはじまる。「第二艦隊」「大和」以下八、水上特別攻撃隊ト



尾道の大和セット

第五三五回 宗像大社歌会詠草

大野展男選 毎月25日メ切



老犬のつながれてるし山茶花の今年も咲きぬ紅こぼしつ
(評) 山茶花のみを詠い、余計なことは言っていないが老犬に対する作者のこころがひしひしと伝わる。

うきは市 浮羽町 向 則正

塩を舐め切羽で働きしわが祖父は早く逝きたり五六歳

(評) この歌もじじつのみを述べているが、祖父に対する敬愛の気持ちが痛いほど判る。

宗像市 鐘崎 安永久子

一筆の添書あればパソコンの賀状再び手に取りて見ぬ

(評) 手書きの添書きやと相手の肉声を聞いた思なのだろう。一陣の風の吹いたような。

宗像市 池田 森 龍子

吹き溜る落ち葉のなかの水仙の蕾は春の風まだ知らず

(評) 四五句さり気ない叙述だが、繊細な作者のこころが見える。

福津市 在 自 佐々木和彦

海岸を飛びていたれど鳶は山鷗は海にもどるほかなし

(評) 鳥たちの営みはまた人間の営みにも通ずる。結句は「もどけてゆける」と穏やかに叙したい。

宗像市 曲 天野玲子

よつづかの連山なべて雪被き方形の窓に日本画めきぬ

(評) 死者まで出る北国の雪と違い九州の雪は人々にうるおいを与える。降雪をよつづ作者である。

宗像市 大井 木原ふさ子

強霜に耐へて咲きける臘梅の黄に透く花はまこと臘めく

(評) 下句はよく視て詠ってあるが、「耐へて咲きける」は、折角の歌が道歌めきそしが惜しい。

宗像市 田野 森 甲子

あたたかき雨のしとどに降りしのち佐助の花陽に向きて咲く

(評) 三寒四温のなかの一日の景であろう。佐助の懸命な姿が見え好ましい。

福津市 若木台 野間精一

冬の川に沿ひゆくバスの窓に見え名児山はいづち山並低し

(評) 名児山は高さは僅か一六五メートル。万葉集の坂上郎女の歌が作者の胸中にあるのだろう。嘆息が聞こえるようだ。

宗像市 田久 巻 桔梗

手水舎に母をまねびてをさな兒がハンカチぱくと口に銜へぬ

(評) あどけない幼子のしぐさをうまく活字しててういういしさがあ

宗像市 日里 大和美由紀

ぱちぱちと櫓弾けるて新年の焚火を囲む宮に詣でぬ

(評) 大焚火を囲んで新年を言祝ぐ人々の中の大和さん。作者の自励でもある。

福岡市 南区 井田有久衣

松籟は頭上をこえゆく浜辺こころ沖眺むればかすかな汽笛

(評) 松籟と汽笛、二つの音が一首にあり少々うるさいが、一つの気分は感じられる。

福津市 光陽台 香月照子

友の死が信じられない早春の明るい日さしをただ見つめをり

(評) 突然死の友を悼むこころが「ただ見つめをり」に凝縮され佳作。

選者詠

露の臺また沈丁花匂ふもの雨やみし今朝の庭より取り来
爪切れば必ずどこか傷つけるこれも時間か老いと云ふ名の
腰の痛み足の痺れも老いし今梅が二月に咲くやうなもの



宗像大社歌会 俳句作品集(五一〇)

宗像市 光岡 井上 嘉治

寒椿雪を冠りて朱に染まる

宗像市 日里 花田いつ枝

幸運を運んで来るかに初日の出

宗像市 東郷 宗風社俳句会 吉武 湧泉

恙なく松を飾りて福笑ひ

海と空又曇らせて鬱ふる日

吉田 杏子

青空に凧からみ合ふ初初空

三浦美千代 田中 雨葉

ひろひ読む朝刊膝に日向ぼ

木原 房子

寒空の何と真碧し諸手あぐ

編集後記

未だ離れて暮ら
す息子へ▼先日
の「初宮祈願」お疲れ様でした。よく
泣きませんでした。「お食い初め」も
無事終わり、疲れたことでしょう。し
かし長い人生でたった一度しかない、
重要な人生儀礼です。分らないでし
ょうけど▼その後父は福岡にもどり
ましたが、母の話だと「最近近所のコ
ンビで、初めてかかる眼科であった
モテモテのよつで。あまり調子に乗ら
ないように▼さて、沖ノ島勤務の日程
も決まり、それが終ればいよいよ福岡
での生活が始まります。勿論、福岡空
港まで迎えに上がらせていただきます。
機内で泣いて他のお客様に、母
に迷惑をかけるないように。夜寝るよう
になったあなたのことですから、心配
いらぬとは思いますが▼来福され
ましたら、守っていただいた宗像大社
宇美八幡宮の神様のところにもお参
りしましょう。長い付き合いですが、
今後共よろしくお願ひ致します(MO)

宗像大社社務所 発行所

〒811-3505 福岡県宗像市田島
電話 0940-62-1311(代)
発行人 伊藤佳和
編集人 大塚宗延
制作 ジーエータップ
印刷 セネラルアサヒ

定価1年送料共1,000円